

自發活動と目的活動

——保育原理の問題——

倉 橋 惣 三

此自發活動及び目的活動と云ふ言葉を以て現されて居りますものは随分色々な意味に使はれるのであります。併し此處では豫め一つ御約束をいたしまして、之を精神活動の形式方面の問題として取扱つて見たい。勿論有ゆる形式は何等かの内容なしに存在するものでありませぬからして、實際に現れて來た所に於ては精神活動の形式だけのものと云ふものがある筈はないのでありますけれども、問題の考究としては如何なることが子供に依つて自發されて居るか、如何なる内容の目的生活が行はれて居るかと云ふ其内容的實質的價値の問題と離れまして、只其精神活動が自發的であるか、目的的であるかと云ふやうな純形式的の意味に於て取扱つて見ませう。是は研究上の便宜上の御約束であります。其二つの中でも自發活動と云ふ方面に於きましては其由つて起りました色々の由來を尋ねて見ますと云ふと、可なり生活活動の形式よりも内容と云ふものに結付いて其ことが考へられて居る場合が多いのであります。例へば自發活動と云ふ言葉を我々が使ひますと云ふと教育學史的に必ず一人の代表としてフレーベルを想出するのでありますが、フレーベルの云つて居ります所謂自己活動と云ふものはフレーベルの考に従ひますと云ふと、總ての子供は其生れながらの自然の本來性の中に所謂神性を持つて居りまして、其神性は盡く眞なる美なる誠なるものである。それを自らの力に依つて發動して來る所に自己活動と云ふものがある。フレーベルは斯う云つて居るのです。フレーベルにござりまして自己活動の尊重せられて居る大きな理由は

子供が其本來性に於て神性を持つて居る、それが自ら現れて来る、謂はゞ内容的の意味を以ての言葉であります。

其フレーベルの考を受継ぎまして、或は自己活動、或は自發活動と云ふやうな言葉を使ひます時に、多くの人が其精神活動が形式として自發的であると云ふことと、それが何を自發するから尊いのであるかと云ふことと、詰り内容と形式とを往々にして取混せて用ひて居るのであります。ところで、フレーベルなどに依つて云はれて居ります自己活動の實質的價値の方面は、それも我々として決して無用な問題ではないのであります。それは暫く別にして置いて、今日の第一の問題としては、其内容的方面を盡く切離しまして、純形式的の問題として之を考へたいのです。之だけのことを豫め判然御約束をして置きたいのであります。其精神活動の形式としての考究と内容の價値と云ふことが混雜いたしますと云ふと問題が甚だ曖昧なものになる。又往々にして其曖昧な論議が世の中に行はれて居るやうでありますからして、其判然した區別を此處に御約束をして置きます。

さう云ふ風な御約束の下に、所謂其自發活動と云ふものは何であらうかと云ふ第一の問題が出て来るのであります。便宜上先きに定義のやうな形を一つ假に拵へて置きます。後で壞れるか知れませぬが先きに拵へて見ます。云ふと、所謂自發活動と云ふものは有ゆる活動それ自身の自發力に依つて現れて来るもの。斯う云ふ風に假に定義して置きたい。之を言ひ換へて見ますならば、當該活動が持つて居りますそれ自體の自發力以外の力に依つて助けられて居ないものと云ふことになるのであります。消極的に裏から云つた譯であります。當該活動が持つて居ります。そこで、此の言現し方の中に依つて助けられて居ないもの、斯う云ふ風に考へて置いて見やうと思ふのであります。そこで、此の言現し方の中にあります「當該活動が持つて居る自發力以外の力」、所謂「以外の力」と云ふのが何であるか云ふことを少し考へて見ますと、是が大きく分けて二つに別れるやうであります。

此處に色々自發活動の面倒な問題が別れて来るのであります。一つは兒童の自身以外の力でありまして、例へば教師

の命令に依つて或る活動を子供が行つたさしますならば、是は兒童以外の力、即ち教師の力に依つて助けられ、或は誘はれて居る所の活動でありまして、明かに自發活動と云ふことは出来ない。所がもう一つ心理的に考へました場合に於て、特に子供の自發活動と云はずして、當該活動の自體の自發力と申します所から考へて見ますと、同じく兒童の中にある力ではありますけれども、決して當該活動内のものでない。即ち兒童の中にあります力ではありますけれども、其當該活動以外の活動に依つて誘はれた、或は引出された場合に於ては此當該活動に對しては自發的でなかつたと云はなくてはならぬ。子供の營む活動は連續的に或は無連續的に無限なものでありまして、A活動あり、N活動あり、或はO活動あり、必ずしもABODと続きませぬ。此A活動は子供以外の力に依つては動かされて居るのではありませぬけれども、併し他の活動に依つて是が促されたとしたならばA活動其ものに取つては自發的でなかつたと云はなくてはならぬ。一般に子供の自發活動と云ふことを云ふ時に考へられて居る常識的の考へとしては、こうまで言はなくともいゝ様ですが、併し心理學的に嚴密に考へ、少くも考究の順序としてはそこまで細かに分けて置くの必要がある。例へば子供の前に菓子が置いてある、此御菓子を上けるからして歌を一つ唱つて御覽。其時に歌を唱ふと云ふ活動は必ずしも他人から強ひられた活動ではないかも知れぬ。菓子が欲しいと歌ふのでありますからして、只歌を唱へよと命ぜられた場合とは大いに趣を異にして居ります。其歌を唱ふのは菓子を欲しいと云ふ活動に依つて促された活動でありまして、其歌を唱ふこととそれ自身は決して自發活動ぢやない。即ち、全體としては他律活動ではなくして自發活動のやうに見えますけれども、併し歌を唱つたさ云ふ其當該活動はそれは菓子が欲しいと云ふ他の活動から引出されたのである。

餘計な穿鑿のやうでありますすが斯う分けて置くことが極く必要のやうであります。實際の場合に於きましては、其菓子が欲しいと云ふこと、歌を唱ふと云ふことが今此處で私の取扱ふ程に判然區別された活動でない場合も幾らもある。殊にあの小さな、まだ總てが意識的に反省的になつて居りませぬ子供に於ては其歌を歌ふさ云ふことも亦或る種の自發興味

がそこに加つて居りまして、菓子欲しいと云ふことと歌を唱ふと云ふことが別に二つの活動でない、斯の如く繋がり合つて仕舞つて居ると云ふやうな場合が、殊に幼い子供に於ては多いだらうと思ひます。のみならず菓子欲しいと云ふ活動に依つて惹起された、歌を唱ふと云ふ活動でありますけれども、歌を唱ふこと自身が子供に取つては相當に自發的な性質を持つて居るものであつた場合に於ては、是は何もさう妙に區別をしなくても宜いやうな場合も實際ある。けれども假に極めて極端な場合を此處に假想して見ますと、歌を唱ふと云ふことに付ては、何らの當該活動自體の自發力と云ふやうな名を附くべきものがないが菓子が欲しいと云ふ方は實に當該活動自體の自發力を持つて居つたものであれば、いや／＼歌を唱ふと同じことであつて宜いのであります。又幾らもあると思ふのであります。さう云ふ場合に於て自發活動と云ふものは子供の生活活動の內的關係に於てもよく考究して區別して考へて置かなくちやならぬと云ふ風に思ふのであります。

そこまで嚴密に區別をしたとして、また其上に此處で考へて見なくちやならぬことがある。當該活動自體の自發力と云ふことを何の穿鑿もなしに此處に云つて仕舞つて居るけれども、併し純理論的に考へてそんなものが本當にあるであらうかどうかと云ふ問題も此處に當然起つて來る穿鑿であります。或る考へ方に依りますと云ふと、總ての精神活動と云ふものは其由つて動いて來る所の内部的潜在性を持つて居る。併しそれが實活動となつて外に現れて來る爲には何かの外部的誘因と云ふものがそこになければならぬものである。斯う云ふことは一般の精神活動の心理的特性として考へられる。菓子が食べたいと云ふことは食欲から起りました所の活動でありませうけれども、自發力で考へた、食べた方が宜いと考へた結果ではないので、自ら只食べたくなつたのでありますけれども、併しそれは食べたくなること云ふ潜在内在活動がそれ自身のに出て來たものであるのか、或はそこに菓子と云ふものが其刺激となつて、即ち菓子あるが故に初めて現實的活動となつて出たものであるかと云ふことは、そこは甚だ難かしい問題になつて來るのであります。

學校に來ました子供が何だか非常な興味を以て繪を畫き出した。何を畫けとも云はない。手本も與へない。自由畫に於て綺麗なダリヤを畫き出した。此ダリヤを畫くと云ふことは所謂自由畫と云ふ大體論に於きましては自發活動的のものがあります。併し其ダリヤを畫く所以のものは其朝學校に來る途中でダリヤを何處かで見たと云ふことが大きな原因になつて居る。其點を強めて考へれば矢張外部的刺激或は外部の動力と云ふものが大きな働をして居ると云ふことであるかも知れない。すなはち、内部的潜在的動力と云ふものは心理學的抽象的の言葉としては考へられますけれども、實際に於てはそれが何處までそれ自身だけで出て來るかと思ふ問題は甚だ難かしくなつて來るのであります。殊にあの自發力と云ふものを非常に力説して居りますフレーベルなどが使つて居る言葉を一つ此處に例として持つて來ますと云ふと、フレーベルの言葉の中に所謂自己活動と云ふものはそれ自身で外に現れて來やうとする所のインパルスである。衝動であると云ふことを云つて居ります。ところで恐らく我々の持つて居ります心理學上のターム、言葉の中で一番純粹、内在的の活動性を持つて居るものは衝動でありませう。意志とかと云ふやうなものは、是は極めて複雑な、従つて外部動力と關係を持つたものであります。衝動と云ふ言葉を使ふ時に於ては最も純粹な内在的活動力を持つて居る言葉として取扱はれる。生れて直ぐの赤ん坊、それも既に衝動を持つ。或は殆ど意識を持つて居ない時の生活に於ても衝動的に或る種の活動が起ると云ふやうな使ひ方は、詰り其衝動と云ふ言葉を其最も代表的の意味に使はうとして居るのであります。ところが又もう少し細かに見て行きますと云ふと、心理學の云ふ所に依れば、あらゆる衝動と云ふものも矢張外部的刺激なしに起るものではないと云ふことは云はれる。其現れた所を見て居りますと云ふと、それ程取立て、原因とするに足りないやうな刺激であるのか知れませぬが、心理的に云へば矢張何等かの外部刺激と云ふものがなければ、衝動そのものも雖も現れて來ない。斯う云ふやうな、純自發的な衝動と云ふ言葉を使つた場合でもさう云ふことが云へるとしますならば、漠然たる自發能力と云ふやうな言葉を云つた時に、精神活動全體を含めた自發活動と云ふ様な言葉を使つた時に、それが果して何處ま

で純内在的潜在的力だけで動いて来るものか或は我々が気が付かない所に、気が付かないだけであつて、實は大いに外部動力が働いて居るか、そこは甚だ難かしい問題になります。此問題は此處で其問題自身を追究して突き留める必要がないのでありまして、斯う云ふ問題が片方に有得るを云ふことを頭の隅に置くことで以て止めて置きます。

兎に角自發活動云ふものを、さう云ふ風な考察の下に置いて見ますと云ふと、其自發活動と云ふことの自發活動たる本當の意義と云ふものは、生活活動の出發點に關する問題であるを云ふことが、上來述べた所で大體考へられて來ることなのであります。少くもあらゆる自發活動に關する論議の中に、其自發活動それ自身としては結果の概念と云ふものは這入つて來ないのであります。すべて、活動と云つた所で、ちよつと起つて、ちよつと消えるものではなく、多少の繼續を持つて居るものであります。其繼續の内容過程と云ふものを考へて見ます。總ての活動は出發點と、それが通つて行きます過程と到達します結果と此三點に於て考へられるのであります。總ての活動は出發點と云ふことは結果に付て少しも關係しない言葉であつて、過程に付いて少しも關係して居ない言葉であつて、出發點だけに付いて云つて居る言葉であります。斯う云ふことはまあ一つの確定的のものとして宜からうかと思ひます。此點も自發活動とか自己活動などと云ふ言葉が使はれます時に可なりはつきりして置くべきことであります。

自發活動と云ふことを申します時に、其具體的實際的の例として子供の生活の中に幾らもある譯でありませうが、多少纏つたものとして擧げられて來るものは遊戯であります。必ずしも遊戯ばかりが自發活動ぢやないのであります。子供の所謂實際生活の上にも亦自發的に幾らも當んで居るものでありませうが、併し普通に自發活動の模範的の具體例として遊戯と云ふものを多く擧げて來る。フレーベルが遊戯と云ふものを教育上非常に價値あるものとして考へた、それも矢張自發活動の具體的表現として遊戯を取扱つて居ると云ふことに他ならないのであります。フレーベルが幼稚園に云ふ言葉を發明しない時に、其場所に名付けて居つた言葉は「幼兒の自發活動を尊重して遊戯に依つて教育する場所」と云ふ

名前でした。キンドルガルテン云ふ言葉は後になつてフレイベルが苦心の結果思付いた言葉でありまして、其初に、あのブランケンブルヒに初めた事業なるものは、幼児の自發活動を尊重して遊戯に依つて教育する場所と云ふ名前で始められたのです、是は詰りフレイベルに於て自發活動云遊戯云ふものが如何に密に結付いて居るものであるか云ふことの證明になるのでありませう。

所が遊戯云ふものは今日我々の知つて居る所に依りますれば極めて複雑なものであつて、極めて繼續の長いものであつて、決して初から仕舞まで自發活動だけで行くものではない。若しも初から仕舞まで自發活動だけで行くものが遊戯であるさしますならば、遊戯の途中に於て子供が遊び方を學ぶと云ふやうな問題は何處にも置場のない問題になつて來るのであります。すなはち今日我々の考へる遊戯に於てはさう云ふ複雑な意味を含めて之を考へて居る。併しフレイベルが何故遊戯と云ふものを特に自發活動の最も典型的具體例としたか云へば、其遊戯活動の出發點が自發的である云ふことに他ならないのです。遊戯は自發活動である、だから偉いものであると云ふ、「だから」云ふ言葉の中に極めて疎漫な色々のものが含まれて居るのでありますが、遊戯が此意味に於て獨自の性質を持つて來るのは、其出發點に於て云はれて居るのです。遊戯と云ふ問題に付ては御承知のやうにフレイベルは教育的であります、純心理的に遊戯を解釋しやうとする人が幾らもありません。其遊戯云ふものを特に心理學上の問題として取扱はう云ふ所以は、詰り子供の遊戯が實際生活、殊に大人の生活と比べて何だか違つて居る云ふ所を氣が付きまして、其何だか違つて居ると云ふ、何だかを突止めて見たい。其説明概念を見出したい云ふ所から種々な遊戯論と云ふものが學者に依つて試みられる。其例へば一つ、例のスペンサー或は詩人シルレルなんかの名に依つて行はれて居ります勢力過剩説、——遊戯と云ふものは子供の持つて居る勢力の過剩であるといふ様な説で、何故勢力過剩などと云ふやうな問題を以て遊戯其ものを説明しようかとしたか云へば、詰り何故遊戯云ふものが其出發點に於て自發的に出て來るか云ふそこを見て、人から強ひられたのぢや

ない、厭々して居るのぢやない、結果を考へて打算的にするのでもない、自らする、其自らと云ふ所を過剰勢力によるものだと説明しようとしたものを見るこゝが出来るのであります。或は此の説に對して全然反對の位置に立つて居る説に、グロースの本能説とでも云ふものがあります。其本能説と云ふものは勢力過剰説が取つて居りました純機械的の説明に對して、本能云ふ非常に内容を持つた言葉を使つて來たのでありますからして、そこにグロースの考が前の説よりも非常に發展をして居るのであります。けれども併し本能と云ふ言葉を特にグロースが取用ひた所以は何故かといふと、矢張出發點に於て自發的であり自然的であるからです。

何故自然に子供が遊ぶか、それは本能の結果であるといふのは、其の自發的出發點を説明したい爲である。最近に又此グロースの考に對して、此點ではありませぬが、寧ろグロースの取つて居る内容に關する色々の方面に對して、反對に立つて居るスタンレーホールの遺傳的動的習慣説といふのがある。その考も、内容に於ては實に色々の問題が出て來るのであります。遺傳的動的習慣と云ふ字を特に頭に用ひて居る所以は、スタンレーホールが遊戯を見るに其出發點に於て他の生活と特色が違つて居ると云ふ所に著眼して居ると云ふことなるのであります。是等の色々の人の考へ方などを参照して見ましても、自發活動と云ふものは色々の生活活動の其出發點に關する問題であると云ふことを云つて宜からうと思ひます。

さて、我々の普通の生活に於ては出發點よりも結果を主體とするのが普通であります。又結果をのみ主にする功利的考に反對する處の、例へば其生活活動その物を主にする一種の美的生活、過程そのものに價値を置くと云ふやうな問題も其處に起つて來る。併しながら所謂其自發と云ふ概念を教育の中で我々が取扱ふ時に、何故其精神活動の出發點に關する問題を、そんなに大騒ぎするのであるか、といふ問題が先づ起つて來べきでせう。

自發活動と云ふことの心理的説明は先づ只今申上げたやうなことで打切るとしまして、それを教育論の中で教育者が頻

りに尊重する所以、言換へれば、精神活動の結果でもなく、精神生活の過程でもなく、其出發點に關する特色を何故そんなに大騒して尊重するのでせうか。教育は勿論結果を豫期して居るものである。方法論上の如何なる説が出たとしまして、結果と過程なしには教育と云ふものが我々に意義あるものでないのでありますが、それにも拘らず活動の出發點と云ふ所に於て意義のある自發と云ふことを、何故そんなに尊重するのかと云ふことは、是は大いに考へるべき問題でありませう。

その答へとしては、先づ、何だか自發と云ふことが詩的な言葉である。窮窟でない。自由なやうな暢としたやうな又當世的な或る響を持つた言葉でありますから、何となく迎へられるやうな點をもつて居るのですが、只それだけならば、是は問題ぢやありません。併しながら、それを追究して其實質を見極めて、我々が自發と云ふ言葉を使ふとすれば、何故結果を從的にして、さう云ふ活動の出發點に關してのみ大騒するかと云ふ此問題は大いに考へなくちやならぬ問題と思ひます。そこに於て自發活動と云ふものが正當なる教育上に於ける位置を見出し得るか見出し得ないかの分れ目になつて來ると思ひます。或る見方からすれば、兒童が自發活動を持つて居る。此の自發活動的本性を持つて居ると云ふことは良きも悪しきもない。只自然であると云へばそれだけのことであります。良いからするのぢやない、悪いと云つたつて止めることが出来ない。と斯うも考へられないこともない。それでサイコロジイの研究は、そこで止つて仕舞ふのであります。教育の方は自由に人間の活動を選択し支配する親切な權利を持つて言ふに拘らず、何故之をそんなに大騒するか。

是は色々の考へ方で、解釋が出来ると思ひますが、その一つとして是は反動に過ぎないと云ふことが出来ます。過ぎないといふことは自發活動それ自身の價値に何ら輕蔑した意味を持つて居りますのではありませぬ。自發活動を考へ出した、其自發活動と云ふものを大層尊重し出した其所以が教育者の本當の新發見に基くのであるか、或は反動に依るものであるかと考へて見た丈けのことです。例へば此自發活動論者の代表者としてフレーベルをもう一度引いて來ると

しますならば、此問題はあの人の教育の根本概念として、特に自發活動と云ふものを尊重し、折角自分の考に依つて建てましたものに學校といふ名を附けるこゝを頗るに拒みまして、自發活動を尊重して遊戯に依つて教育すると云ふやうなそんな名前を附けた所以は、詰り何か、即ち當時の學校教育法と云ふものに對して極度の反感を持つて居つた爲であります。何故フレーベルの持つて居る當時の教育改造の意見と云ふものを其時フレーベルが強く感じたかと云へば、當時フレーベルの周圍に行はれて居りました學校教育法に對する反動反感に他なりません。それもあんなことではいけないと、心理學的に見れば實に何でもない。當然である。心理學的研究を以て子供を見るものは子さの自發性は誰も直ぐ氣が付く。そんなに大騒しなくても宜い。此自發活動を自分の學說の根底にまで引上げて來たことは是はたしかに反動に依るところもあつたのであります。

其フレーベルをして反動の感を起さしめた其當時の學校教育法は何であるかと云へば、一口に云へば極度の他律的教育方法であつた。言換れば自發活動と云ふものを少しも認めなかつた生活である。言換れば、總ての兒童の活動の結果だけを考へて、其出發點に於て何らの考慮を拂はなかつた教育法である。さう云ふ風に云へるのであります。それもどうも子供の自發活動を尊重しないであんなことをして居る、可哀想だと云ふやうなセンチメンタルの問題ではありませぬ。子供に優しくしてやると云つたやうなそんな情愛的の問題でもない。精神活動の結果のみを取扱つて其出發點にある意義を見出さないことが合理的でない間違つて居るのであるといふのです。そこで逆に出て、結果よりも出發點に重きを置く、フレーベルの學說が出来たものと、斯う解釋が出来ると思ひます。

所謂フレーベルの考其ものとは違つて居りますけれども、さう云ふ風な教育主張の傾向の中に屬すると考へて差支へない所の所謂今日の自動主義教育と云ふものも、要するに矢張生活活動の出發點の自動的な所に重きを置いて居るのであります。斯う云ふ風に考へまして、其次に起つて來ることは、其出發點に重きを置いて、過程及び結果の如何を問題外に

置く其自發活動と云ふものが、兒童生活の全體の教育的働きとしてどんな風に動いて來るものだらうか、斯う云ふ問題が起つて來るのであります。詩人が子供を歌つて居る、見よ、子供の自由にして自發的なるをと、子供が自發的に外から何ら強制されるのでなく、結果に依つて促されるのでなく、過程の考慮もなく、只出發點から出發點へと蝶の如く飛んで居る、そこが、大人の生活に比して、いふにいへなく面白いといふのは、それは詩人的の見方であります。併し教育者が子供を見る時に其詩人的の見方も非常に必要なことでありませうけれども、教育は歌つて終るべきものぢやない。其歌ひたくなる美はしいあの自發性と云ふものが全體の教育的作用の中に於ては、どんな働をして呉れるものか、我々が計畫して命令して、設備してするならば、元來が教育の爲に考へたことでもありますからしてそれが教育作用の中にどんな位地を持つかと云ふことは、誰でも分つて居るに相違ない、併し活動の出發點だけに於て意義を見出した自發活動と云ふものを、しかも詩に歌ふだけでなくして、面白がるだけでなく、それを一つどう教育に於て行つて行くかと云ふことが、教育者に、さう云ふことが出来る爲に教育作用全體の中にそれがどんな働をして呉れると云ふ判然した安心か確信がなければならぬ譯であります。

若し本當に子供の自發活動を歌の如く見て、それを直ぐに眺めて、自動主義教育を取つた人があつたことすれば其詩人の心持は非常に尊敬しますけれども、教育者としては甚だ足りないと言はなくちやならぬ。そこで其自動主義教育論（或は斯う云ふ新教育學說の名前を挙げますと、それを舉げて居る人を聯想いたしますが、私が此處で聯想します其人よりも恐らく其説は大きなものだらうと思ひますから、誰の説と云ふやうなことを此處では別にいたして置きます。）といふ様なことをいふ現代教育論者の中にある其詩人的教育論と云ふものが、自發性と云ふものをどう考へて居るか考へて見たい。ところで、斯うではないかと思ふのは、自發的出發それ自身は生活活動の形式でありますからして、それに良いも悪いもない、それも、フレーベルの様に、兒童の持つて居る神性を自發して來ると云ふやうに、内容を入れてありますならば、之

に價値が出まゝけれども、御約束した如く、今日の此考究に於ては内容方面を切離して居りますから、自發的出發それ自身には何らの價値もない、只自然だと云ふ外ありません。而もそれを教育の考察の一つの根本として見て行きますのは、子もが其自發的出發點に依つてぎん／＼動いて行きます間に、其活動の過程、所謂生活過程の間に於て、大自然が執つて居ります發達原理に忠實に信頼して居ると云ふ以外にないと思ひます。

自然と云ふものは他の力を以てさうするのではないので、或は宗教的には他の力が働いて居るか知れませぬが、自然それ自身の問題としては他からどうするのでもないのです、あの通りに發達をして來た、又して居る、其自然の取りました發達原理と云ふものに忠實に従ふ爲には、なまじ出發點に於て人間的小細工をしないで、自然のまゝの出發をさせるのが適當なことであらうと斯う考へる。出發點を人間的にして置いて後は自然がされる發達原理に従はうと云つても、是はなかく、難かしいことであります。所謂二股の心持になる。自然が取れる經過と云ふものに我々が信頼するものがあるとするならば、出發點も又自然的な出發點に従はなければならぬと云ふことになるのであります。(つゞく)